

## 看護サービスの価値とその測定について

川島みどり(健和会臨床看護学研究所)

「看護婦さんが少々つつんしていても、設備が良ければその方が居心地がいいですよ」。「いいえ、病院はオンボロでも、看護婦さんが優しくて優秀な方がずっと患者は幸せですよ」。ハードとソフトは決して二者択一ではないだろう。だが、目に見えにくい看護サービスの良しあしを、受け手の人々は何で評価するのだろうか。また、看護サービス内容で設備やシステムの不備を補えるのだろうか。看護サービスを病院アメニティの一部とする考え方も従来はあった。かつては診療報酬レセプト上看護料金は独立していなかった。基準看護、基準寝具、基準給食と言う横並びの制度が長く続き、看護料は入院料の一部であった。

物に代わってサービスに価値をおく時代になり、今まさに、看護の価値、看護サービスの有用性が問われている。だが、看護サービスとは何か、どのような価値を生むのかについて、看護専門職のあいだでもまだ共通の理解はないのではないだろうか。人々の生活の中から生まれた看護の源泉は、つきつめると家事労働や主婦労働にたどり着く。つまり、過去にもその経済価値をめぐって論争しきりであったように、看護サービスの価値を経済的に評価することの難しさがここにあると思う。

目を現実に向けよう。新看護体系と同時に生まれた補助者体系、そのために、保助看法における療養上の世話の専門性が強く問われてる。介護保険下での介護職者との協働場面でも同様である。在宅での診療面の看護婦の領域も見直しが始まっている。いったい、専門職としての看護婦が投入するサービスは何か、産出される価値は何か。そしてそれはどのようにして測定されるのか。

21世紀はQOLの時代ともいう。病気や障害や高齢の如何に関わらず、そして人生の終末期であっても、その人のQOLを高める看護サービスについて、その価値と測定方法について語り合いたい。

---

1951年日本赤十字女子専門学校卒業 同年から1971年まで日本赤十字社中央病院勤務 その間母校教官 1971年 卒後研修コース 大学等で非常勤講師 1983年健和会臨床看護学研究所長 2000年放送大学客員教授 主著「看護技術の現在」「看護の癒し」「キラリ看護」など